博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏　　名　　石澤　尚子
学　　位　　博　士（口腔保健福祉学）
学 位 記 番 号　　新大院博（口）第3号
学位授与の日付　　平成26年3月24日
学位授与の要件　　学位規則第4条第1項該当
博 士 論 文 名　　口唇口蓋裂児の母親の心情と治療に対する意思決定過程

論文審査委員　　主査　教 授　齋藤 功
副査　教 授　高木律男
副査　教 授　小野和宏

博士論文の要旨

【背景と目的】

口唇口蓋裂は外表奇形のなかでも高率に認められ、日本においては出生児 500 人に 1 人という頻度で発生している。その治療においては、口唇や口蓋の形成手術、顎裂部の骨移植手術などの外科治療、正常言語獲得のための言語治療、歯列不正や咬合改善のための歯科矯正治療、う蝕をはじめとした歯科疾患の予防処置など、出生直後から成人まで長期にわたり、さまざまな診療科での治療が必要とされ、患者はいうまでもなく、その保護者、とくに母親の身体的、精神的負担は大きい。

そこで本研究では、患者・家族の立場に立った治療のあり方を見いだすことを目的として、近年、医療分野でも応用されるようになった質的調査により、これまでの量的研究からは知り得なかった口唇口蓋裂児をもつ母親の心情を浮き彫りにし、治療に対する意思決定過程とその構造を明らかにする。

【対象と方法】

対象は N 大学医歯学総合病院で外科一次治療（口唇形成手術・口蓋形成手術・顎裂部骨移植手術）を終了した口唇口蓋裂児（性別：男 4 名・女 4 名、裂型：唇顎裂 1 名・唇顎口蓋裂 6 名・口蓋裂 1 名）の母親 8 名（年齢：33～43 歳）とした。文書および口頭で研究計画について説明し、研究協力の同意を得た後に、半構造化面接を行い、録音した逐語録をデータとした。分析は、グランデッド・セオリー・アプローチに準じて行い、データは文脈ごとにラベルをつけ、比較と統合を繰り返すことでカテゴリー化を行い、主要概念を導き、生成した概念より「治療に取り組む母親の心情の変化」と「治療に対する不安のサイクル」の概念図を作成した。

【結果と考察】

母親の心情と治療の意思決定に関わる概念として、口唇口蓋裂児の出生に始まり、＜ショックと戸惑い＞＜母親としての自責感＞＜治療と将来への不安＞＜手術の可能性と治療を乗りこえた実感＞＜治療への前向きな姿勢＞＜親子の対立と子どもの意思の尊重＞＜医療者からの情

報とサポートの救い＞＜同病者の家族からの情報とサポートの救い＞＜家族からのサポートの救い＞＜医療者に対する信頼＞が抽出された。治療と将来への不安を抱えながら、出産後のショックや戸惑いから救ってくれた医療者に対する信頼や家族の支えをもとに手術に臨み、手術の可能性と治療を乗りこえた実感を通して、また次の手術へ進むという、＜治療と将来への不安＞＜手術の可能性と治療を乗りこえた実感＞＜治療への前向きな姿勢＞が手術のたびに循環する構造が考えられた。

一方、口唇鼻修正手術などの二次治療においては、母親の自責感を根源とする手術を受けさせたいという親の気持ちと、手術を受けたくないという子どもの気持ちとの間に対立が生じ、母親と医療者というこれまでの関係から、患者の意思を中心にした母親と医療者という 3 者での意思決定へと変化が生じていた。

【結　論】

患者および家族の視点を取り入れた質の高い治療を実践するためには、母親の心情と治療に対する意思決定の構造を理解したうえで、インフォームドコンセントを基盤とした包括的で継続的な支援が必要であることが示された。

審査結果の要旨

日本においては、先天異常の中でも口唇口蓋裂児の発生頻度は比較的高く、およそ出生児 500 人に 1 人という発生頻度とされる。口唇口蓋裂患者は、顎顔面領域の機能障害のみならず顔面の形成不全を伴い、外科手術、言語治療、矯正治療など長期にわたる治療管理が不可欠であることから、患者自身はもとより保護者、特に母親にとっては精神的負担が大きいと推察される。臨床の現場において、医療を提供する側からの情報提供は必要かつ十分に行われつつあるが、患者や保護者など医療を受ける側の視点に立った医療の在り方についての検討は未だ十分とは言い難い。

本研究は、患者・家族の立場に立った口唇口蓋裂治療のあり方を見いだすことを目的として、近年、医療分野でも応用されるようになった質的調査により、これまでの量的研究からは知り得なかった口唇口蓋裂児をもつ母親の心情を浮き彫りにし、治療に対する意思決定過程とその構造を明らかにすることを試みた。

対象は、N 大学医歯学総合病院で外科一次治療（口唇形成手術・口蓋形成手術・顎裂部骨移植手術）を終了した口唇口蓋裂児（性別：男 4 名・女 4 名、裂型：唇顎裂 1 名・唇顎口蓋裂 6 名・口蓋裂 1 名）の母親 8 名（年齢：33～43 歳）とし、半構造化面接により得た逐語録をデータとして文脈ごとにラベルをつけ、比較と統合を繰り返すことでカテゴリー化を行い、主要概念を導いた。

その結果、母親の心情と治療の意思決定に関わる概念として、口唇口蓋裂児の出生に始まり、＜ショックと戸惑い＞＜母親としての自責感＞＜治療と将来への不安＞＜手術の可能性と治療を乗りこえた実感＞＜治療への前向きな姿勢＞＜親子の対立と子どもの意思の尊重＞＜医療者からの情報とサポートの救い＞＜同病者の家族からの情報とサポートの救い＞＜家族からのサポートの救い＞＜医療者に対する信頼＞が抽出され、治療と将来への不安を抱えながら、出産後のショックや戸惑いから救ってくれた医療者に対する信頼や家族の支えをもとに手術に臨み、手

術の可能性と治療を乗りこえた実感を通して、また次の手術へ進むという、＜治療と将来への不安＞＜手術の可能性と治療を乗りこえた実感＞＜治療への前向きな姿勢＞が手術のたびに循環する構造を導き出した。また、口唇鼻修正手術などの二次治療においては、母親の自責感を根源とした手術を受けさせたいとする親の気持ちと、手術を受けたくないという子どもの気持ちとの間に対立が生じ、母親と医療者という二者の関係から、患者の意思を中心に据えた母親と医療者という三者での意思決定へと変化が生じていることを示した。

以上のことより、質的調査を利用して口唇口蓋裂児をもつ母親の心情と治療に対する意思決定過程とその構造を明らかにし、患者および家族の視点を取り入れた質の高い治療を実践するためには、インフォームドコンセントを基盤とした包括的かつ継続的な支援が必要であることを示唆した点に学位論文としての価値を認める。